

徳川将軍のリーダーシップ

江戸幕府一五代の将軍たち

——徳川幕府のガバナンス考

吉備国際大学客員教授

飛島 章

第三話 大老井伊直弼の決断

下り坂の時代へ

8代将軍吉宗による享保の改革によって、現実社会に合わせて政治や法、制度を変えていく試みが成功して、幕府直轄領での年貢の収納量はピークに達した。しかしその後、農作物の収穫量の拡大による余剰分は農民の手許に蓄積されていくことになり、その分幕府の徴収量は下降線を辿っていくのである。第3話から下り坂の時代に入る。とは言っても、それは江戸幕府の勢いが徐々に落ちて行くということであって、社会全

体が暗く沈み込んで行くわけではな
い。

今の世でも、下り坂を歩む人々は
皆樂しげで、会話も弾んでいるよう
に見える。転倒でもないかぎり、
下り坂は楽しいのである。

田沼時代

享保の改革から半世紀の後、吉宗
の孫にあたる10代将軍家治の治世
で、幕府財政の逼迫に大胆な改革で
臨んだのは、側用人田沼意次であっ
た。この田沼意次が活躍した時代、
年号でいえば宝暦年間から天明年



田沼意次

間までを田沼時代と呼ぶが、この時
代はさまざま新しい学問や芸術、
例えば浮世絵や俳諧などが目覚まし
く発展した時期でもあった。これを

宝暦・天明文化と呼ぶが、町人たち
にとつて田沼時代は江戸時代260
年間の中で、もっとものびやかで、
ゆつたりとした空気が流れていた時
代であったと思われる。時代小説で
は、池波正太郎先生の『剣客商売』
の世界と言えば、より具体的にイ
メージしていただけるのではないだ
ろうか。

田沼意次の出自

田沼家は、大坂夏の陣に徳川方に
属して戦い、ついで紀州徳川家の初
代頼宣に仕え、紀州藩士となった。



10代将軍徳川家治

意次の父、田沼意行は、吉宗がまだ部屋住みのころから任せ、吉宗が將軍になると江戸に連れられ600石の幕臣となった。江戸城では共に幕臣となった元紀州藩士により紀州閥が形成され、側近職にとどまらず勘定所にも進出していた。意次にとって、紀州藩出身という家筋、そして父親が吉宗の子飼いの家来であったことの意味は大きかった。

意次は、意行の嫡男で享保4年に江戸で生まれ、16歳で吉宗の嫡男、家重の小姓に召し出された。翌年、父親の死去で遺跡600石を継いだ。延享2年に家重が9代將軍に就任したことで、意次は將軍小姓になり、翌年小姓頭取に昇進して目覚ましい出世と加増が始まる。小姓組番頭を経て、宝暦元年には御用取次になった。意次33歳のときであった。その後幕府評定所で、美濃郡上一揆という難事件を果敢に処理し、優れた政治的、行政的な力量を示したことを評価され、遠江国相良で1万石の大名となった。

宝暦10年(1760)家重が引退し家治が將軍に就任すると、そのまま御用取次を続けるよう命じられた。家治からも信任を得てさらに出世を続け、7年後の明和4年に側用人に昇進、位階は従四位下(じゆしあひげ)に上がり2万石を与えられた。昇進はさらに続き、側用人兼務のまま明和6年に老中格へ、明和9年には老中となり3万石となった。

田沼意次はおそらく、柳沢吉保よりも強い権力を保持したと思われる。時代背景の違いはあるものの、意次の強い権勢は、幕府職制の頂点である老中と、將軍側近が詰める「奥」の役人の頂点である側用人を兼ねたことに拠っている。意次が老中にまで出世した背景には、御用取次にあつた時期からの財政改革に貢献したことがあつた。

運上・冥加金による財政改革

幕府直轄領の年貢収入は、吉宗治世の晩年となる延享元年(1744)に180万石のピークをつけてそれ以降減少して行き、家治治世の明和期に入るとコメと金の合計の収支が赤字へと転落する。高率の年貢により収入を増やして財政を運営する享保期のやり方は、もはや通用しなくなっていた。加えて、コメ以外の商品に比べて米価が相対的に安い状態はその後も続き、幕府のみでなく諸藩においても、武士全般の暮らしを困難にさせた。それゆえ、できる限り高率の年貢収入を維持しつつも、年貢以外の新たな増収策を模索するしかなくなっていた。

意次が採用したのは、活性化した商品生産や流通とそれを支える金融、さらに各種事業の請負などから運上・冥加金および長崎貿易からの増収策などである。運上とは、各種の営業に課した税、冥加金とは、営業上の特権を与える見返りの献納金のことである。また、株とは、営業上の特権、権利のことで、享保の改革の際に、江戸十組問屋、大坂二十四組問屋の株仲間を公認して営業上の特別な権利を認め、その見返りに一組につき一年に冥加金100両を上納させた。意次は、都市のみならず在方(田舎)にまで株仲間を拡げ、さらに幅広い業種に株を認めるなど、同業者の仲間組織を株仲間として積極的に公認し、冥加金を上納させる策をとり、財政収入の増加を図ったのであつた。

田沼意次の失脚

から、生産者や供給者が多く生活する農村に立脚しており、意次のような新参ものが新たな分野で改革を進めるには、幕府組織の中に味方を増やすことから始めなければならなかった。意次が、大名家と婚姻関係を結び、さらに幕府役人や大奥のなかに人脈を形成し、要所要所に一族を配置した理由がここにある。意次は単に権力の亡者であったとする見方もあるが、大きな組織の中で改革を押し進めるには、政治的な工作は不可欠であった。

そのような中、安永6年將軍家治の子で次期將軍予定の家基が急死し、意次は家治の養子の選定を命じられた。意次は一橋家当主の徳川治済と謀り、三卿上位の田安家を排除する形で治済の子、豊千代（のちの家治）が將軍継嗣に決定した。この功績で、意次は1万石加増を受け4万7000石となった。一老中の立場で將軍継嗣問題に関わったことも、門閥老中たちにとっては許しがたい越権行為であった。

さらに天明元年には、意次の嫡子意知が老中昇進コースの出発点、奏者番に就任した。その2年後に

は若年寄にまで昇進し、合わせて將軍側近の職務を命じられた。これが周囲には意次から意知へ権力が継承される道筋をつけたと理解され、幕臣たちの反感が募りに募って、ついに、意知は江戸城中で旗本佐野善左衛門政言により斬殺された。

この刃傷事件は佐野善左衛門の乱心が原因と判定され、後刻切腹が申し渡され落着した。しかし、この事件は明らかに老中たちの差し金によるものである。このまま意次・意知親子がのさばるのを見越すわけには行かないとの判断であろうが、子の意知を選んで殺害させるあたりは、権力争いの非情さを見る思いである。

この事件をきっかけに意次への批判や反発が噴出し、天明6年の將軍家治の死と相前後して、意次は失脚の坂を転げ落ちてゆく。老中職からの辞任に留まらず、田沼家は5万7000石から

1万石へ減俸となった。さらに、相良城の没収の処分を受けただけでなく、意次が推進した諸政策の多くは中止された。このような厳しい処罰が行われた理由は、本人が賄賂の有用性を主張して憚らなかつたこともあるが、やはり松平定信による寛政の改革が始まったことが大きく影響した。意次の失脚をもって、江戸期の側用人は消滅した。それは改革の担い手の消滅でもあつた。

寛政の改革

天明7年（1787）、一橋家から入った13歳の家斉が11代將軍と

なつた。老中には、御三家をはじめとする家門・譜代の後ろ盾をえた白河藩主松平定信が就いた。定信は田安宗武の子であつたが、家斉が將軍継嗣に選ばれるに際し、意次の力を借りた一橋治済によって白河藩主へ養子に出されるといふ経緯があつた。治済は、今度は定信をつかつて意次を葬つたのである。

定信は、天明7年から老中首座として幕政改革にあつた。この寛政の改革では、まず賄賂が蔓延した世の綱紀粛正を図り、農村の荒廃が進むなか帰農令を出して農業労働力を確保することや、田沼時代の商業資本重視の政策を改めて、商品流通を抑制する政策や株仲間を多くを廃止した。寛政の改革は、教科書では江戸三代改革のひとつとして高く評価されているが、実態は田沼意次が行つた改革の全否定であり、「田沼つぶし」であつた。結果的に田沼時代の財政の回復を打ち消すこととなり、6年後の寛政5年、定信は老中職を辞任した。

將軍家斉の治世

側用人が消され、老中松平定信が



11代將軍 徳川家斉



文化・文政時代を代表する葛飾北斎の富嶽三十六景

去った後は、しだいに將軍家斉の父治済と將軍の側近が勢力を伸ばし政治を主導するようになった。その中心に座ったのが、家斉の小姓、水野忠成であった。この時代（文化・文政時代）には、田沼時代にもまして商業資本重視の政策がとられ幕府の収入は増えたが、家斉が豪華な生活を送ったために幕府財政はますます困窮し、三都をはじめとする商人に御用金を賦課したり、貨幣改鑄を繰り返すことによって、何とか財政の維持がはかられたのであった。

家斉の放縦な生活は、晩年まで改まることなく、その治世は実に50年にも及んだ。天保8年（1837）に子の家慶に將軍職を譲ってからも天保12年に死去するまでの4年間、家斉は大御所として政治の実権を握りつづけた。家斉は、多くの側室との間の子を含め55人もの子供をもうけたのであるが、そのうち成人した28人は、女子には家門や外様の雄藩に嫁するにあたり化粧料という名の多額の持参金を与え、男子は有力大名の養子として送り出す代わりに、幕府からの貸付金を帳消しにしたり、藩の借入金金を幕府が肩代わりするなどしたため、幕府の財政に大きな負担が上乘せされることになった。

家斉ファミリーの形成

將軍と大奥による奢侈は、その経費の増加が財政を圧迫するだけに留まらず、大きく拡がった姻戚関係は、さらに深刻な問題を引き起こした。家斉の子や孫たちは、三卿の田安家・二橋家・清水家にとどまらず、御三家の紀伊徳川家や尾張徳川家にも送り込まれた。さらに、家門（親藩）や外様大名へ行き先をあげた。家斉が与えた「斉」の字の諱をもつ大名たちの中には、直

接的な婚姻関係にない者も含まれるが、その数は70人近くに及んでいる。これらの大名たちが新たな婚姻を通して、さらに広い縁戚関係で繋がることで、謂わば「家斉ファミリー」が形成されるようになった。

幕府の財政に責任を負う幕閣にしてみれば、將軍とそのファミリーが節約をしないかぎり、幕府

財政の立て直しなどできるはずがない、と考える。しかし、財政を立て直す手立てを知らない將軍と大奥の女たちは、「幕閣らの働きがまだまだ足りぬのではないか？もつと頭を使えー」となる。ファミリー内の結びつきが強まれば強まるほど、ファミリーと幕閣たちとの距離は益々隔たることとなった。幕末へ向けて両者の不信任は益々募っていくことになるのであった。

家慶の養子斡旋

長命で数多くの子を生じた家斉であったが、その子や孫たちは意外に



12代將軍 徳川家慶

も病弱で短命に終わる者が多かった。將軍となった家慶は、家斉の時代に送り出したものの、程なく死去した兄弟たちの後継者さがしに奔走することになる。

家慶が將軍に就任した翌年の天保9年（1838年）7月に、家慶の実弟の越前福井藩主松平斉善が若くして突然死去した。斉善には跡継ぎがいなかった。後継藩主を選ぶにも家慶の兄弟はすべて養子として出払ってしまったため、選ばれたのは、田安徳川家3代当主徳川斉匡の8男、錦之丞であった。のちの松平春嶽である。錦之丞は10月に

正式に越前松平家の家督を継ぎ、わずか11歳で越前藩主となった。

松平慶永

田安錦之丞は、文政11年9月江戸城内の田安屋敷で生まれた。錦之丞は幼いころから読書好きで、勉学に励むことを常としていた。行く行くは伊予松山藩主・松平勝善の養子となることが決まっていたが、家慶の計らいにより、急遽養子先が越前福井藩に変更された。藩主となった後、元服して將軍家慶から偏諱を授かり慶永と名乗った。翌天保10年、肥後熊本藩主細川斉護の娘、勇姫と結婚した。

この時期、諸藩の藩財政は赤字が常態化しており、越前藩も例外ではなかった。慶永が藩主に就いた翌年2月、全藩士の俸禄3年間半減と藩主自身の日常の出費の大幅削減策として、食事は一汁一菜、衣服は木綿が定められた。さらに、藩政を中根雪江らの改革派にまかせ、大胆な藩政改革が行われた。中根の下で、後に活躍する由利公正や橋本左内らが育っていった。

一橋慶喜

のちに將軍となる慶喜も家慶から声のかかったひとりである。慶喜は、天保8年(1837)江戸小石川の水戸藩上屋敷で生まれた。徳川斉昭の7男であったことから七郎麿と命名された。七郎麿は幼いころから斉昭の強烈な尊王精神の中で育った。斉昭は、生後7ヶ月の七郎麿を江戸から水戸へ移した。子供を華美な江戸の風俗に染まらせないためである。以後、一橋家を相続するまで水戸で育つことになる。七郎麿に施された教育は文武両道、すなわち文学および水泳・弓

道・馬術などであったが、利発な少年は主に「武」のほうで能力を発揮した。

弘化4年7月、一橋家8代当主昌丸が若くして亡くなった。一橋本家を絶やすわけには行かないと考えた將軍家慶は、



水野忠邦

水戸徳川家に対し礼を尽くして七郎麿を一橋家の跡継ぎとしたい旨を伝えた。七郎麿を藩主慶篤の控えと考えていた斉昭は、当初難色を示したが、將軍の必死の懇願を拒むことはできなかった。11歳の慶喜は水戸を發つて江戸の一橋門内の邸宅に移った。

海防強化策としての天保の改革

天保12年(1841)家斉が没した。家斉が君臨した54年間のうち、晩年は大塩平八郎の乱や天保の大飢饉などで世は騒然としており、家慶の下で老中の職にあった水野忠邦

が、享保・寛政の改革を理想として幕政改革にあたることになった。「カリスマ將軍」と化した家斉に面と向かって、ものの言える幕閣がいなかっただけに、満を持しての登場であった。

忠邦は、肥前唐津藩の領主であったが、唐津藩は長崎警護にあたる役目の故に、幕閣に加わることはない家柄であったが、当時権勢を有していた水野忠成に近づき、遠州浜松に転封を許され、以後順調に出世して老中にまで昇ってきたのであった。

忠邦はまず大幅な人事異動を行なうて、家斉の寵臣たちを幕閣から一掃し、改革を宣言して、文武の奨励、儉約を命じ、風俗の肅清を図った。19世紀の初頭から日本近海に出没する外国船の対応として、それまでの「無二念打払令」(文政8年に幕府から發せられた、日本沿岸に近づく外国船は理由の如何にかかわらず打ち払うことを命じたもの)を廢止して、天保13年に「薪水供与令」を發した。これは、漂着した外国船に対して、薪水や食料を供与することを命じたもので、合わせて諸藩に

沿岸の防備を強化するために洋式の軍隊訓練や砲術指導を行わせた。

薪水供与令の本旨は、外国船との武力衝突を避け、時を稼ぎつつ軍備強化を進めるというものであった。幕府はその軍備強化による財政負担に耐えられないという判断から、年貢増徴・上知令あづちれいなどの収入増加策をとった。上知令とは、江戸・大坂十里四方の大名領・旗本領などをすべて天領（幕府直轄領）とし、大名・旗本には替地をあたえるというもので、入り交じった複雑な領地関係をまとめて幕府の支配を強化し、富裕な都市近郊を天領にして貢租の増収をねらったものであった。しかし、対象となる大名・旗本の猛烈な反対運動に直面し、改革は頓挫した。結局これが命取りになって、忠邦はその年のうちに失脚した。

諸藩の改革

幕府に比べてはるかに財政規模の小さい諸藩では、幕府よりいっそう財政の窮乏に苦しんでいた。松平定信の寛政の改革の前後にも、米沢藩の上杉鷹山とうざん、熊本藩の細川重賢しげかたらによる藩政改革を行なった藩があつ

たが、天保の改革の前後には、より多くの藩において改革が実施された。薩摩藩の調所広郷しよひろさとや長州藩村田清風せいきうによる財政改革を始め、水戸藩・肥前藩・土佐藩・越前藩・宇和島藩などでも藩政改革がおこなわれた。それらは西南の雄藩に多く、それらの大部分が改革に成功して、このちの幕末の政情で発言力を蓄積していくのであった。

改革のリーダーシップとは

諸藩においてなされた改革の多くは成功したのに反して、この時期の幕府の改革がうまく行かなかつた原因はなんであるか？これは、下り坂の幕府の運命さだめなのか？

寛政の改革が直前の田沼改革への反改革であつたという特殊事情を考慮に入れて、田沼時代から天保の改革に至る時期の3人の将軍、家治・家斉・家慶に共通しているのは何か、から考えてみたい。

まず、思いつくのは、それぞれが生まれ育ちは違いながらも、将軍に就任するまでに、領国経営を身近に

見聞きする機会に恵まれなかつたという点である。その機会が無かつた

のは将軍の責任ではない。側近の自覚と能力次第で、ある程度カバーできるのではないだろうか。必要なのは、将軍としての心構えであつた。将軍たち比べて、諸藩藩主が置かれていた事情ははるかに切実であつた。幕府の監視の下で、藩の圧政が強すぎると農民の騒動を誘発するし、また藩財政が破綻に瀕しても、藩主に処罰が下ることになる。

詰まるところ、最高権力が改革への使命感、責任感を有しているのか否かにかかつている。使命感は「統治精神」と言い換えてもよい。その辺が将軍や藩主のリーダーシップに現れてくるのであろう。このように私は考えるのだが、読者の皆さんの



徳川齊昭

ご意見は如何であらう。

老中首座 阿部正弘

歴史の話へ戻る。天保14年（1843）水野忠邦の失脚のあと、老中首座に就いたのは阿部正弘であつた。就任直後から、フランス・オランダ・イギリス・アメリカなどに次々と開国を迫られる事態となつた。嘉永6年（1853）6月、アメリカ大統領の命を受けて、ペリーが軍艦4隻を伴って、浦賀に來航した。この時、家慶は病床にあり、幕政を預かる阿部正弘は国内の諸勢力をあげて問題の解決にあたることを必要を感じ、前例を破つて朝廷に報告をするとともに、諸大名にその対策についての意見を求めた。正弘の意図は、国内の諸勢力を幕府の下に結集させることであつたのであるが、結果は裏目に出て、幕府批判の嵐が吹き荒れることになった。

真つ先に声をあげたのは、水戸藩前藩主徳川斉昭であつた。斉昭は、かつて藩主の時代に対外問題につき幕府に対して積極的に建議を起こしていた。斉昭の干渉がましい主張は幕閣の反発を招いたうえに、水戸藩

うのである。

水戸藩の尊王思想

このとき斉昭に代わって、嗣子の慶篤が10代藩主に就任した。老中阿部正弘の求めに対して、斉昭は再び自説を展開した。それは、譜代大名で構成される幕府指導層のみでは事態に対応しえないとして、諸大名や旗本を含む広範な層の人びとを登用して幕府政治をおこなうべしという主張であった。斉昭の存在は、自分たちの発言力の向上を強く望んでいた有志大名たちの共感を呼び、斉昭への接近の動きを加速させることになった。

斉昭は攘夷論者の証しとして、江戸防備のために大砲74門を鑄造し砲弾と共に幕府に献上した。これが江戸湾お台場に据えられた。また、石川島で洋式軍艦「旭日丸」を建造し献上した。その功績を以って安政2年に幕府の軍政改革参与に任じられるも、間もなく老中首座が阿部から堀田正睦に交代すると、幕府は「開国方針」を明確に打ち出し始め、斉昭は再び幕政から遠ざけられてしま

ここで、水戸藩について少し語っておきたい。水戸徳川家は、御三家・三卿の中で唯一家斉ファミリーに組み込まれずに、藩祖の頼房からの血脈を守ってきた。また、水戸藩は「水戸学」の中心的存在でもあった。

水戸学は、2代水戸藩主の徳川光圀が始めた歴史書『大日本史』の編纂のために諸国から招聘した学者たちの研究成果から生まれたもので、儒学思想を中心に、和文・和歌などの国文学、史学、神道を結合した政治思想の学問であった。幕末には斉昭が設置した藩校・講道館を拠点に再び興隆し、藤田幽谷・東湖父子らが登用され、尊王思想の大本山とも言える存在となった。

尊王思想とは、幕府が握っている権力はそもそも天皇が与えたものであり、幕府に政治

を司る能力が失われた場合には古代の天皇政治を理想とする「王政復古」により、幕府は大政（施政権）を天皇に返還するべきであるという考え方である。この尊王思想が攘夷派の心柱となった。

家慶から家定へ

嘉永6年6月ペリーが来航した直後に將軍家慶が没し、家慶の4男家定が30歳で跡を継ぐと、幕臣の中に強力な指導力を有する將軍を据えなければ、この難局を乗り越えられないとの意見が浮上してきた。家

定がひどく内気で、対外危機に対し適切な指示を出せないと思われたためであった。

次期將軍の有力候補としてささやかれたのは、一橋慶喜であった。強硬な攘夷論を吐く徳川斉昭の実子であること、年齢（17歳）が適当であったこと、極めて優秀だと噂されたことなどによった。

これに対し老中たちは、就任して間もない將軍を前にして、次の將軍の話を持ち出すことをたしなめたのであるが、心の内は次期將軍として紀州和歌山藩主の徳川慶福を望んでいた。老中たちには、まだまだ幕政を担い続ける自信があり、10歳の年少將軍の方が御しやすいという計算もはたらいっていた。

一橋派の形成

慶喜を將軍継嗣に据えようとする動きの先頭に立ったのが、越前藩主松平慶永であった。慶永は薩摩藩主島津斉彬と連携をとりながら、賛同を得られそうな人物に働きかけた。これに応じたのは、藩主クラスでは、宇和島藩主伊達宗城、土佐藩主山内豊信（容堂）、尾張藩主徳



13代將軍 徳川家定

川慶恕、徳島藩主蜂須賀斉裕らであった。これらの有志大名は、それぞれの縁戚関係のある朝廷の重臣、近衛忠熙や三条実万らに働きかけ、内勅（天皇が内々に出す勅書）の力をもって、慶喜を次期將軍にしようとした。

この動きに対して、当の慶喜はそれを阻止する方向に動いた。嘉永6年8月に父親の斉昭に宛てた書簡で、「將軍職に就くことは氣骨の折れることであり、また將軍となつて失敗することになれば、自分はとても耐えられない」という本心を吐露する断りの心境を綴っている。しかし慶喜の思いとは裏腹に、周囲はこれを「謙遜」と理解して、慶喜を次期將軍の座につかせようとする動きは、このあと本格化する。

この時期の政治状況を一橋派対南紀派、二派の争いと解説する歴史書



井伊直弼

が多くあるが、私はそれを誤りだと考える。本論で展開してきたように、江戸幕府の権力構造の核心は「將軍機関」であり、將軍個人ではない。將軍機関は老中・若年寄制という合議による意思決定の仕組みで運営されていて、その構成員を幕閣と呼んできた。一橋派が対立しているのは南紀派ではなく、幕閣が担う將軍機関なのであるから、「統治を担う幕閣に対して異議を唱える一橋派が形成され、徐々に一橋派による幕閣包囲網が形を整えつつあった」というべきであろう。

大老井伊直弼の登場

將軍継嗣に何らかの問題が生じた場合に、決まって声がかかるのが彦根藩井伊家であった。井伊家は、幕府の中で常勤の役職に就いてはいなかったが、日常の幕政に関わる老中職の家柄よりも格上であった。また、譜代大名筆頭として將軍の冠婚葬祭を取り仕切り、京都朝廷の警護役兼監視役でもあり、江戸城奥の溜詰にあつて將軍の助言役でもあった。

安政5年（1858年）4月、彦根藩13代藩主井伊直弼が大老に任じられた。將軍家定と老中たちの総意により、「この難局を乗り切るには掃部頭を恃むしかない」ということで、直弼が招かれたのであった。大老職を奉じた直弼の側も、その日に至るまでの道は決して平坦なものではなかった。

井伊直弼の生い立ち

直弼は文化12年（1815）、井伊家11代藩主井伊直中の14男として生まれた。幼名は鉄三郎。母は側室お富の方であるが、鉄三郎5歳の

時に35歳の若さで死去した。兄弟が多かったことから養子の口もなく、天保2年父親直中の死後、弟直恭と共に三の丸の屋敷に移された。直弼は17歳からの15年間を、300俵の部屋住みとしてこの屋敷で過ごした。この間、自らを花の咲くことのない埋もれ木にたとえ、「埋木舎」と名づけた居宅で過ごすのである。それは決して投げやりな生活ではなく、文武の道に励み真剣に生きる決意に満ちたものであった。直弼は、石州流茶道に精進してやがて茶人として大成するのであるが、和歌や鼓、禅を学ぶに留まらず、山鹿流兵法や居合術の修得にまで及んだ。

直弼32歳のとき、彼の人生は大きく変化することとなる。弘化3年（1846）、12代藩主で兄の直亮の世子であった井伊直元（直中の11男）が死去したため、兄直亮の養子として彦根藩の世嗣となり、江戸詰めとなった。藩主直亮が在地の時は、直弼は藩主に代わって登城するようになった。

その3年後の嘉永3年、こんどは藩主直亮が57歳で死去し、直弼は藩主となった。翌年6月直弼は藩主と

して初めて彦根入りし、直ちに藩政改革に着手した。さらに領内巡見を開始し、安政4年までの6年間で9度に分けて領内全域を巡った。

直弼が藩主に就いて江戸と彦根の間を往復した時期は、ペリーが浦賀に2度に亘り来航し、日米和親条約が調印され、さらにハリスが着任して通商条約締結を求めて来たことで、幕府と朝廷の間で揉めている時期と重なる。そして、將軍継嗣と通商条約調印の問題で、幕閣と一橋派との対立が頂点に達しつつある時期でもあった。そのような状況下で、



黒船来航

直弼は大老職に就任する。直弼44歳であった。

將軍継嗣の決定

井伊大老就任の2か月後、幕府は重要な決定を突然発表した。ひとつは、日米修好通商条約を調印したこと、続いて將軍継嗣を紀州徳川慶福と決めたことであった。孝明天皇の同意を得ないまま幕府が通商条約に調印したことに対し、徳川斉昭に促された松平慶永と水戸藩主徳川慶篤、尾張藩主徳川慶恕は、直弼を詰問するために江戸城に押しかけた。大名の江戸城への登城は大名ごとに日時が定められていたが、それを無視しての登城であった。この無断登城を理由に処罰が下されるに至って、幕閣と一橋派の対立は決定的となった。無断登城で隠居・謹慎処分の対象になったのは、徳川斉昭の他に松平慶永（春嶽）と徳川慶恕（藩王を退いた後は慶勝）であった。慶喜は当初、登城停止という軽い処分であったが、のちに隠居・謹慎に変更された。

將軍継嗣の決定については、直弼の独断専行で進められたのではな

く、將軍家定自身による決断であったことが近年明らかにされている。家定が、そもそも篤姫と婚姻が成ったばかりの時期に、將軍の養子候補を擁立した一橋派に強い反感を感じていたことや、慶喜が次期將軍に就任すれば実父の徳川斉昭が幕政を壟断しあるいは大奥を差配するに違いないと、恐れを抱いた向きが將軍に直接訴えたことなどが原因と見られている。その家定は、継嗣決定の半月余りのちに30代半ばの若さで没した。

安政の大獄

井伊政権が下した通商条約調印の決定は、孝明天皇の激怒を招いた。そして天皇は、井伊大老が率いる幕府にとって黙認しがたい行動にでる。通商条約無効許調印を非難し、再度条約問題についての評議を命じる勅書（戊午の密勅）を、まず水戸藩に、ついで2日後に幕府に下したのである。また、勅書には一橋派諸侯の処分を理解しがたいとの考えも盛りこまれていた。朝廷と諸藩との直接的な結びつきを禁じていた幕府にとって、これは到底看過できるも

のではなかった。これが安政の大獄の引き金となった。すなわち、一橋派に属する藩主や藩士、あるいは公卿・浪士を対象に弾圧が、幕府によつて加えられた。

安政の大獄は、江戸幕府の統治原理への回帰を狙ったものであった。幕府を開いた家康から家光までの3代に亘り、幕府の幕閣・幕臣たちが知恵を結集して練り上げた幕府統治の原理原則は、將軍宣下、知行宛行状、武家諸法度、軍役そして老中・若年寄制などに反映されている。

この原理を突き崩すような言動に敏感に反応した井伊政権は、江戸初期に幕府が全国諸大名を一糸乱れぬ形で統率していた時代を再び招来することを狙っていた。それは困難ではあるが、決して無謀な企てではなかった。むしろ、幕府の威信を保ち社会秩序を維持する役割を担う政権として、必然的で合理的な判断であった。安政の大獄における処罰の末端で、吉田松陰や西郷隆盛、橋本左内らに加えられた暴力的な部分だけを切り上げて、直弼や幕府を批判・非難するのは一面的すぎるのではなからうか。

安政の大獄の意味

先に、水野忠邦による天保の改革は頓挫した、と書いた。失敗したのではない。海防強化の方針を実現するには財政的な裏付けが必要で、その手段である幕府の収入増加策の一端にはころびが生じたということであった。海防強化の方針に変更がないのであれば、天保の改革の本旨は今なお持続しているはずである。直弼を始め幕閣たちは、一橋派に加えた処罰を、これから始める財政改革の第一歩として位置づけていたのではないか。私は、そのように考える。

江戸幕府の発足当初、「軍役」の制度があった。幕府が諸藩の軍兵を招集した場合は、大名は石高に応じた兵員と装備を提供することとなっていた。これは、将軍が諸大名に与える所領安堵の「ご恩」に対する反対給付としての「奉公」に該当する責務である。社会に軍事的な騒乱がなくなるに従って、軍役は普請に形を変えていく。江戸初期は城郭普請に、やがて河川の治水工事に大名たちは駆り出されるようになっていった。時代は下って諸藩が財政的に疲

弊してくると、幕府が命じる普請も西南の限られた有力藩に集中することとなり、やがて幕府の命令に素直に応じない事態を招くこととなった。

幕閣たちの認識では、江戸初期の「軍役」や「お手伝い普請」の仕組みを復活して、比較的余力のありそうな外様雄藩にも海防費用の分担を割当てなければ、幕府財政はとも持ち堪えられないものであった。この難局を切り抜ける長期的な対応は、国家として海防のための統一された軍隊（海軍）を持つことであった。その軍隊は諸藩がそれぞれの財政力に応じて経費を負担する形でなければな



桜田門外の変

らない。

それを実現する手立ては、幕府が朝廷を取り込み、天皇と將軍の連名で全国の大名に命じて、諸藩の財政から継続して一定額の上納金を徴収する仕組みを構築することであった。幕藩体制を根本から改革する仕組みを実現する上で、幕府を指揮し朝廷を懐柔する力量を備えているのは、井伊直弼以外にないという認識が將軍と幕閣たちにあつたはずである。直弼自身は疾うに、そう腹を決めていた。安政の大獄の歴史的位置づけは、これらの視点を外しては考えられないのである。

桜田門外の変

安政7年（1860）3月3日、その日は上巳の節句の日であった。その行事のために登城する直弼をのせた駕籠が、降雪の中を紅葉山下の井伊家上屋敷から桜田門近くに進んできたところで、水戸藩脱藩浪士らの襲撃により直弼は殺害された。享年46歳。閏3月晦日直弼の死が公表され、翌4月井伊直憲13歳が彦根藩主を継いだ。

（第3話終わり）